

今年も自然法則は健全に働きましたね。雨ばかりで日本が土砂崩れの下に埋まってしまうかと心配しましたが、梅雨が明けると、暑い夏がやって来ました。それとともに、一学期も終わり、哲学の授業もおしまいになりました。残念なことに、時間が足りないせいか、世間が悪いせいか、哲学の歴史は折り返し点にも届きませんでした(想定内なのですが)。みんなが大学に行ったり社会人となったりすると、耳にする哲学者の名前としては、カントとかヘーゲルとかニーチェとかサルトルとか言った近代の人でしょう。それらの有名人について何も教えないなら、私の授業は何の役にも立たなかったということで非難ごうごうとなるのでは、と心配で夜も眠ることができなくなるといやなので、夏休み前にプリントでその後の哲学の流れの非常に大ざっぱな説明をしておきます。

西欧の哲学(思想)の歴史は、古代のギリシアに始まり、中世キリスト教世界で発展し、先日話したトマス・アクイナス(1225~1274)で完成の域に達したと考えられます(そう考えない人も当然いますが)。しかし、トマスの哲学は14世紀に、これも以前話したイギリス人ウィリアム・オッカム(? ~ 1349)から崩壊し始めます。そうして、色んな哲学が乱立したところに、ルネ・デカルト(1596~1650)という人が、それまでの伝統とは全く異なった哲学を初めて、これがきっかけとなってますます様々な哲学が生まれていきます。ではこの「それまでの伝統とは全く異なった哲学」とはどういう意味か。



先日の授業でアリストテレスの言葉をいくつか読みました。ぼやっとして「聞いても聞かず、見ても見ず」の人、あるいは目を開けながら寝るといった超人的な技術を駆使していた人もいたかもしれないので、念のため繰り返します。一つは「真理とは何か」について、「真理とは『あるものをあると言い、ないものをないと言うこと』」、あるいは、人間なら誰も疑い得ないことは、『同じものが有りかつ有らぬ』ということはない(矛盾率)ことだ、というのがありました。これらを聞くと、「そんなこと当たり前だのクラッカー(常識)やんか」と笑う人がいるでしょう。まさにその通り。つまり、ギリシアの哲学、とくにプラトンやアリストテレスに始まり、中世ヨーロッパで発展した哲学(スコラ哲学)は、常識に基づいています。もちろん、常識と言ってもいろいろあるわけで、どんな常識でも正しいというわけではない。けれど上述した(「上に言った」を難しく言うところなる)考えは普通の人なら何の抵抗もなしに認められるでしょう。

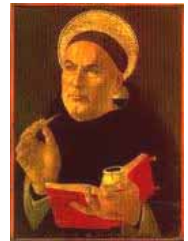
ところが、こういう常識も否定する人がちゃんといるので。哲学の歴史に、現れては消え消えては現れるのが、これも先日話した「懐疑論」とか「相対論」というものです。その特徴は、「真理なんてない。たとえ百歩譲って、真理があったとしても、人はその真理を知ることができへん」という考えです。この考えは、最初ギリシアではソフィストたちによって唱えられたが、ソクラテス、プラトン、アリストテレスたちによって反駁されます。が、アリストテレス以降のヘレニズム時代に再び広がりました。また中世ヨーロッパでもスコラ哲学が衰えて、辛辣な非難を受ける(「ぼろかずに言われる」を難しく言うところなる)ようになるルネサンスという時代に(15 , 16 世紀)に再び広がったのです。さらに、現代もとても広がっている考えです。ですから、みんなもいつか耳にすると思います。

もしこの理論(真理はない、あったとしても知ることはできない)が本当なら、何も断言してはいけないこととなります。そして当然、先ほどの「真理とは『あることをある』と言い、『ないことをない』と言う」という定義も成り立たなくなります。なにせ、「あること」と言っても、ものがあることを人は知ることができないというわけだから。この懐疑論の理屈(正確には屁理屈)に対しては、プラトンたちが「もし『真理はない』というなら、何事も断定できへんはず。『真理がない』という断言をする

こと自体がおかしい。そうしたら、『真理がない』という一つの真理を断言してるやんか」と言って反論しました。これは正鵠を射ている（「正しいことを言う」を難しい言葉でいうところなる）。こういう矛盾はよく見られるのです。例えば、現在も「人それぞれの考えを尊重せんとあかん」と言う人が多い。でももしそう言うならば、「真理がある」という考えも尊重すべきなのに、そういうことを言う人に対しては「あいつはこちこちの独断論者や（安易に肯定的な結論を導き出す奴という意味）」と言って非難するのです。

さて、でもどうして常識的な考えを打ち立てた哲学がかくも簡単に覆されるのでしょうか。自然科学なら、時とともに進歩するのに、哲学はなぜ一進一退のような進み方をするのでしょうか。「この世界はいったいどうなっているのか」という根本的な問題を、非常に頭のよい人たちが鋭い観察力と、分析力を備え、まじめに物事を考えていったわけですが、哲学の場合、学問としての進歩というのは一直線ではありません。それどころか、混迷や退歩も見られます。つまり、先人がせっかく深く考えて得た理論を、後輩が簡単に否定することも起こるのです。一つは哲学が「存在全体」を扱うという、簡単ではない営みだからです。考える対象を限って、観察分析を進めて行くのは、意外と簡単です。ですが、そこから全体的な見解を引き出すのは、難しい。だから、ある人が確立された理論を立てても、意外と簡単に反論が出てくるのです。しかし、それだけではありません。

しっかりした理論が簡単に覆されるという、この不思議な現象を説明する、ある哲学者の言葉を紹介しましょう（少々書き換えています）。「哲学の難しいところは、人間の心構えの問題がある。人は真理を発見することにはきわめて熱心であるが、いったん発見された真理を受け入れることは大いにいやがるものだ。論理的に説明されてやり込められるのは、私たちにとってうれしくないことである」（ジルソン、『理性の思想史』、76頁）からです。哲学は普通、自分より前の人たちの考えから出発して自分の考えを作り上げていくものですが、前の人正しいことを言っている、それを全面的に受け入れるのは自尊心が許さないという場合があるのです。



ジルソン（1884~1978）という人は、世界的に有名なパリ大学で哲学を専攻。論文のために与えられたテーマが先に話したデカルトでした。しかし、デカルトを調べていると、この近代の哲学の父と言われる人が、いかに多くを中世のスコラ哲学（それまでは古くさい、宗教に汚染された哲学と考えられていた）から影響を受けているのかが気付き、スコラ哲学の研究者となった人です。このジルソンがトマス・アクイナスについてこう言っています。「トマスは、ものごとを誰の目にも真であることが明らかであるような仕方で述べたので、彼の時代から今日まで、彼の述べたことをほんとうに素直に受け入れられる人は、かえってごくわずかしかないのである」と。つまり、わかりにくい難しい言葉を並べるならば、多くの人から「これは深遠な哲学や」と崇められるが、わかりやすい仕方で説明すると、「なんや、そんなもん。子供でもわかるやんか」と言われて、軽視されるということのようです。

デカルトは、真理とはそれまでの「あることをあるという」ことではなく、「明晰で判別な概念」と定義を修正しました。これは各自が頭の中ではっきりとした概念を持つならそれが真理だ（わかりやすい例は数学の定理です。三平方の定理は、頭の中で明らかに証明されるでしょう）と言うわけです。彼以降、中心的な哲学者は、それぞれが自分の頭の中で「明らか」と思われることを真理だとして主張したので、けったいな哲学がたくさん現れました。そうして、哲学がますます評判を落としていくのです。もし来年、この授業を続けることができたなら、その様子を少しでも見てみたいです。

では、有意義な夏休みを過ごしてください。